



四旬節第3主日 (ヨハネ 4:5-42)

あなたから永遠の命に至る水がわき出る

四旬節第3主日を、田平教会の聖堂ではなく、田平修道院のチャペルで迎えることとなりました。誰がこんなことになっていると想像できたでしょうか。想像を超える試練、それは人間によって与えられた試練ではなく、神様からの試練に違いありません。

3月12日、運転免許証の更新のために平戸警察署に行きました。典礼委員長の長男さんもそこには居ました。2月29日から、教会聖堂でのミサもないし、珍しくひげを伸ばしてみようと思って伸ばしたのですが、免許証の写真のことは考えていませんでした。できあがった免許証はご想像の通りのひげ写真でした。次の運転免許更新のときにはきれいさっぱりの写真で写りたいと思います。

今週の福音朗読箇所は、井戸で、サマリアの女性とイエスが「生きた水」について対話する場面が選ばれました。今、マスク・消毒液・トイレットペーパーなどが手に入りません。新型コロナウイルスの影響で必要だと感じているから探し求めているのですが、きっと影響が収まればすべてが余り物になり、街中に溢れることになると思います。

本当に必要だと思って探し回ったのに、混乱が収まるとなぜ「余り物」になるのでしょうか。それは「その時だけ必要な物」だからではないのでしょうか。しかし、ヤコブの井戸でイエスがサマリアの女性に与えようとしていた「生きた水」は、「その時だけ必要な物」ではなく、「その人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(4・14) のでした。

長崎教区で公式のミサが中止になって2週間が過ぎました。私たちは十分に、「渇き」を感じています。イエス・キリストをいただくことのできない「渇き」です。聖体拝領が奪われて、どれだけイエス・キリストに養われることが大切なのか、心の底から感じていると思います。

まずは、できることを続けてください。ミサには、「みことばの食卓」と「聖体の食卓」があります。「聖体の食卓」が奪われても、自宅で、「みことばの食卓」を用意することができます。「聖書と典礼」を使ったり、実際の聖書を使ったりして、神のことばが洗礼を受けた人すべてを養ってくださることをより深く体験する機会にしましょう。

せっかくなので、今週の福音朗読箇所から自宅でもできる「尊ばの分かち合い」を紹介したいと思います。まず、朗読箇所を目で読み、次に声に出して読みます。目で読むときも、きっと自分の声が心の中で聞こえながら読んでいると思います。心の声に耳を傾けながら目で読みましょう。二回目の声に出して読むときは、家族がいるなら、家族の集まりの中で代表者が読みましょう。そして、家族みんなが朗読者の声に耳を傾けます。朗読している本人も、声に耳を傾けて読みます。

二回目に声に出して読んだあと、少し静かな時間を作りましょう。心に残った箇所があると思います。もう一度、心に残った箇所を目で読み返します。目に留まった箇所は、何かを呼びかけていると思います。

語りかけてくる声をそのまま、みんなの前で分け合ひましょう。家族の中には、心に残った箇所がほかにあるかも知れません。

それぞれ、違う箇所を分け合ひましょう。分け合ったことが、朗読した物語をもっと身近に感じるきっかけにしてくれるかも知れません。心に残ったことばを、その日の中で何回か思い出し、温めましょう。これできっと、「みことばの食卓」から糧を得て、一日を神様のために、神様と共に過ごせるようになると思います。仕事をしながら一日過ごしても、学校に通いながら一日を過ごしても、「みことばの食卓」から養われた人は、一日を神様のために、神様と共に過ごす人なのです。

今回、中田神父が目で読み、声に出して心に残った箇所は、サマリアの女性が最後にイエスに言った言葉です。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」(4・25)

この女性のことばが私に訴えかけているのは、まず「キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています」つまり、誰を探し求めるべきかを知っているということです。彼女は自信を持って、自分がより頼む相手は「メシア、キリスト」であると知っているのです。

私たちは流行に飛びついたり、周りの人の話に流されたりすることがあります。この女性も、周りに流される生活をしてきたかも知れない。五人の男性と生活したのですから、その時自分が頼れる人に飛びついたのでしょう。けれども本当により頼む相手はこれまでの男性ではなく、「メシア、キリスト」であると知っていたのです。今は生活を神様に感謝できていないけれども、神様に心から感謝し、礼拝できる日を必要としている女性なのだろう。そういうふう思い巡らしました。

サマリアの女性の最後の言葉に私が惹かれた理由がもう一つあります。「その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます」と言っています。これは、メシアが一切のことを知らせてくれる日を、ずっと待っていたということでしょう。知りたいこと、ずっとモヤモヤしていることを、すべて明らかにしてくれる。そのメシアと出会う日を、いつどんなときも待ち続けていたのです。

私は、金曜日と土曜日は、次の説教のきっかけが見つからないかなあと思いつつ思いながら過ごしています。金曜日には金曜日のすることがあります。それでも、「日曜日の説教の中心線が見つからないかなあ」とずっと考えながら一日過ごしているのです。ですからサマリアの女性の気持ちはよく分かるのです。その、寝ても覚めても待ち望んでいることが、今、彼女の目の前にあるのです。

「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」(4・26) 本心に欲しかったもの、その時だけ必要なものではなく、「その人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」神のことばが今、与えられました。聖体の食卓から遠くなっている今こそ、「神のことばは生きていて力がある」この体験を積みましょう。そして、今日聞いたことを持ち帰り、知らせることにしましょう。